

滋賀県立琵琶湖博物館協議会 平成30年度第1回会議会議次第

日 時 平成30年(2018年)9月18日(火)

13時10分～15時30分

場 所 琵琶湖博物館1階セミナー室

1 開 会

2 議 題

- (1) 平成30年度の博物館活動について
- (2) 新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画
平成30年度取組状況について
- (3) 来館者を増やす取組について
- (4) 第3期リニューアルについて
- (5) その他

3 閉 会

〈配布資料一覧〉

- 資料1 平成30年度博物館の状況について
- 資料2 新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画
平成30年度取組状況について
- 資料3 来館者を増やす取組について
- 資料4 展示空間の再構築について

[13時10分 開会]

1 開 会

○司会（副館長）：それでは、定刻になりましたので、ただいまから滋賀県立琵琶湖博物館協議会、平成30年度第1回会議を開催いたします。

開会にあたりまして、館長の篠原がご挨拶申し上げます。

○館長：皆さん、こんにちは。琵琶湖博物館の館長をしております篠原と申します。よろしく申し上げます。

平成30年度第1回の会議ということになりますけれども、本年度から新しく委員になっていただいた方もおられます。

私どものほうも、副館長を初めとして、何人かがかわりましたので、リニューアルの真っ最中ですが、いろいろな意味合いでリニューアルされるということになります。最後に、今、リニューアル真っ最中で、3期6年のうちのちょうど真ん中になりますので、今年の4月以降にリニューアルした部分のところも見ていただきたいというふうに思います。新しく来られた人は、どういうことを協議するのかということ、むしろリニューアルを見たほうがよくわかると思いますので、十分見ていただければなというふうに思います。

いつも博物館協議会の貴重なご意見、忌憚のないご意見が出てくるんですけども、私どもとしましては、それを十分踏まえて、年度計画を立てたり、基本計画を立てたりしてっております。改善できるところと改善できないところがいろいろあって難しいんですけども、簡単に言いますと、お金のかかることはなかなかできないということなんですけれども、できる限り、皆さんの貴重な意見を博物館運営、経営に生かしていきたいと思いますので、十分な議論をしていただきたいというふうに思います。よろしくお願ひしたいと思います。

○司会（副館長）：私は、本日、司会をさせていただきます副館長の高木でございます。どうぞよろしく申し上げます。

それでは、会議に入ります前に、今ほどもございましたように、今回は第12期の協議会の最初の会議でございますので、私のほうから委員の皆様のご紹介をさせていただきます。

お手元の名簿及び座席の順でご案内をさせていただきます。

（委員紹介）

（事務局自己紹介）

○司会（副館長）：それでは、議事のほうに入らせていただきます。

当協議会の定数につきましては、条例第7条の規定によりまして、15人以内というふうになっておりまして、現在、15人中13人のご出席をいただいておりますので、条例第9条の規定により、会議は成立しております。

今回は、第12期協議会の最初の会議でありますので、会長が決まりますまで、私のほうで議事の進行をさせていただきます。

それでは、まず会長・副会長の選任についてでございます。

条例第8条では、会長・副会長は委員の互選により定めると規定されておりますが、いかがさせていただきますでしょうか。

（「事務局一任」の声あり）

○司会（副館長）：ありがとうございます。

ただいま、「事務局一任」の声をいただきましたが、そのようにさせていただきますよろしいでしょうか。

（拍手）

○司会（副館長）：ありがとうございます。

皆様のご同意をいただきましたので、事務局のほうから提案をさせていただきたいと思えます。

事務局といたしましては、これまでの経過もございますので、会長には山西委員、それから副会長には菊池委員にお願いしたいと存じますが、いかがでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

（拍手）

○司会（副館長）：ありがとうございます。

皆様のご同意をいただきましたので、会長には山西委員、副会長には菊池委員にご就任をお願いしたいというふうに存じます。

なお、菊池委員は本日欠席させていただいておりますので、ご了解をお願いしたいと思います。

それでは、山西委員、会長席のほうへ移動をお願いいたします。

（山西委員、会長席に着席）

○司会（副館長）：それでは、以降の議事につきましては、山西会長にお願いしたいと思います。

よろしく申し上げます。

○会長：改めてよろしく申し上げます。

時間も限られていますので、早速議事に入らせていただきたいと思います。

今日の議題は5本用意されていますが、1番、2番につきましては、今年度の今までの活動状況をお話しいただきました上で、そのバックボーンとなっている基本計画の進捗状況、それらを併せてご説明をしていただきます。その上で事業全般につきまして、皆様のほうからご意見を出していただければというふうに思っています。

その次に、3番の来館者を増やす取組ということで、これは特に今回、こちらで議論をしていただきたいという館長からの諮問でございますので、これについては集中的に議論をしたいというふうに考えております。

それから、4番は、現在、基本設計を終えて、実施設計に取りかかっております第3期のリニューアルについて議論をしたいというふうに思っていますので、進行のほう、ご協力をよろしく申し上げます。

(1) 平成30年度の博物館活動について

(2) 新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画 平成30年度取組状況について

○会長：では、まず議題(1)と議題(2)につきまして、一括して事務局のほうから説明をお願いします。

○事務局：事務局の芳賀と申します。よろしくお願いいたします。

資料に従って、ご説明させていただきますと思います。

これからお話しするのは、今年の4月から8月までの活動状況ということになります。

昨年度の状況につきましては、前回の協議会で報告させていただきましたのと、今回配らせていただきました年報のほうにまとまっておりますので、それをご参照ください。

まず、今年度の状況ですけれども、来館者数、4月～8月までが23万6,082人ということです。本日現在ですと、25万7,142人になっておりますけれども、去年に比べて1万人ほど増えたという状況であります。

それから、繰り返しの利用を促すということで、年間パスポートを販売しておりますけれども、こちらのほうの会員数は8月末で8,800人という状況になっております。

それから、平成30年度の主な行事活動について紹介いたします。

まず、一番大きなものとしましては、第2期のリニューアルオープンというのが春から段階的に始まりました。

まず春休みに関しましては、ショップ（3月24日）、それからレストランと別館が4月2日にオープンしております。

下にありますように、ショップ、それからレストランが新しくなっています。レストランのほうでは、これは昨年度の末に発表していますけれども、湖南農業高校の生徒さんとコラボでつくったびわ湖カレーというのが提供されて、人気を博しております。

それから、写真の真ん中の段の右側が別館ですけれども、今まで学校がたくさん来られたときに、雨天時の昼食場所というのが少なかったわけなんですけれども、向かいの旧UNEPの建物を改装いたしまして、このような昼食場所というのを設けております。

また、この別館のほうには、介助ができるような交流施設というのも設けておりまして、そちらのほうでも利用いただいております。

それから、夏休み直前にはディスカバリールーム、それからおとなのディスカバリーが7月6日にオープンいたしました。これは後で見学いただきますけれども、ディスカバリールーム、下の2枚の写真、それから次のページにおとなのディスカバリーの写真が載っております。

こちらはオープンに先立ちまして、7月4日に内覧会を開催いたしまして、580人にご参加をいただきました。

それから、次のページに移りまして、展示活動です。これまで8月までにやってきた展示をそこでは紹介させていただいております。

まずギャラリー展示、これは企画展示室を使った展示で、特に観覧料はとらないものですが、いろいろなところと連携しながらやるということでしております。今年は春休みからゴールデンウィークの直前に向かって、「伊藤園俳句フォトコンテスト作品展」というのをやりました。これは、俳句フォトコンテスト自体が滋賀県と伊藤園の共催で行われているものでして、写真と俳句をつけてコンテストをするというものであります。

それから、ゴールデンウィークから6月上旬にかけては、「描かれた湖国の生き物と風景」ということで、滋賀県立近代美術館と共催の展示を行いました。近代美術館はただいま改装中ですので、こちらのほうでも一部資料をお預かりしております。

そういったものを活用するということと、初めてのコラボということで、ワークショップなども開催いたしました。

それから、夏休みに入りまして、企画展示「化石林―ねむる太古の森」というのを開催しております。これは後ほどご案内させていただけると思います。こちらのほうは11月25日まで開催いたします。

それから、水族企画展示「琵琶湖に固有な魚たちの歴史」、こちらのほうは水族展示に入ってすぐの水族企画展示室で行われまして、夏休みで一応終了しております。

次に、各常設展示及びトピック展示等を紹介いたします。

A展示室の地域の人々の展示コーナーのところで、「近江の平成雲根志―鉦山・鉦物・奇石」の石達ということで、9月30日まで展示をいたしております。

それから、B展示室は展示室の一番奥にあります蔵ケースで、当館が所蔵しております資料を見ていただくということをしてしております。今年は前半は3回、模様替えがえをしております、まず「近江水産図講」の世界―明治期の琵琶湖漁撈ですが、これは当館の漁具が文化財として認められたのと連動しております。

それから、「汽船と鉄道」「琵琶湖疎水」、これらはいずれも今年が明治150年ということで、そちらにちなんだ展示となっております。

それから、C展示室、真ん中のところにそれぞれの学芸員の研究を紹介する「研究スタジアム」というのがありますが、こちらのほうは1年交代で入れ替わっております。今回は第3期ということで、また新しいのが入っております。

それから、水族企画展示室。先ほどの企画展示の「琵琶湖に固有な魚たちの歴史」が終了後、現在はタニガワナマズというナマズの展示をしております。こちらのほうは57年ぶりに新種を発見したということで新聞等にも載って、かなり話題になっておりますけれども、これらを含めて、日本には今、ナマズが4種類いるそうなんです、この4種類のナマズを比較するという形で展示をしております。

それから、マイクロアクアリウムについては、季節物ということでいろいろ展示を替えたりしております、5～6月の田植えの時期に関しましては、「水田のエビたち」ということで、ホウネンエビとかカイエビとか、そういったものを展示しております。現在は、マミズクラゲというのを展示しております。

それから、アトリウム、これは博物館の真ん中にある広い空間の部分ですが、ここもパネル等を立てまして、いろいろな展示をしております。年度前半に関しましては、今年はJAさんの「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクール作品展示というの

をさせていただきました。

それから、おとなのディスカバリーには、これは質問コーナーのところに出しておりますけれども、雌雄のモザイクカブトムシ、それから黄色いオタマジャクシということで、2つ、珍しいものが発見されましたので、展示しております。なお、今はカブトムシだけになっております。

それから、ディスカバリールームでは、これは例年やっているものですが、
「かいこ絵日記をつくろう」ということで、卵から始まりまして、親になって卵を産むまで、7月10日～8月31日まで、リアルタイムで育つところを展示ということでさせていただきました。

以上が展示に関する活動です。

それから、交流に関しましては、数字がたくさんありますけれども、フィールドレポーター、はしかけ、それぞれそのような数字になっております。

それから、資料収集・整理・活用に関しましては、資料点数を挙げさせていただいております。

それから、研究ですが、ちょっと空白になってしまっていますが、こちらのほうは研究部長から説明いたします。

○事務局：研究部長の山川です。

あいているところを口頭で説明させていただきます。

今年度も研究専念ができるように、研究部としましては、昨年度、一昨年度に引き続き、週に1日は研究時間の確保をするということを目指して、各自で専念日を設定してやるという方針でやっております。

現在、上半期にかけては、今、芳賀企画調整課長の説明もありましたとおり、大変事業も多く、精力的に活動しておりますので、これまでの研究時間は皆さんやっておりますけれども、それについての調査というのは、後半期にやろうと思っております。それで、昨年度と一昨年度には、特に1月、2月にやったんですけども、別の時期に設定をして、とろうというふうに考えておりますので、秋に、これから調査をしたいというふうに考えております。

研究成果の発信については、そこに掲げてありますとおりでございますけれども、特に一昨年度から始まっている琵琶湖博物館ブックレットについては、6巻、7巻という形で、特に7巻は2015年度の企画展示で、「琵琶湖誕生」をやりましたけれども、そのときの話題をさらに膨らませて、わかりやすく琵琶湖はいつできたということで、当

館の里口学芸員が執筆したものを刊行しております。

また、研究部としましては、研究の推進を図る指標の一つとして、海外との研究機関との連携を推進しております。特に今年度は韓国の洛東江生物資源館との研究連携の推進ということで、7月には韓国からエビの調査に来られて、一緒にサンプリングをしたりとか、ついこの間、台風の後に韓国に行っていたんですが、今年度12月に、当館において合同セミナーを開催します。それにあたっての打ち合わせを9月3日から6日にかけて、3名の者が行って、調整を図ってきたところです。

実際、12月3日には向こうの研究者3名、それからこちらの学芸員も4名ほど、発表し合って、お互いにどういう共同研究が推進できるかというところを模索するというを考えております。

そういった形で、今年度は研究部は動いております。

○事務局：ただいま説明してまいりましたけれども、いろいろやっているんですが、何が何件とやると、中身がよくわからないというのがありますので、前々回からやっているんですが、やったことを全部並べてみようというところをつくっております。

2枚めくった次のところに、一覧表の形式でやっております。前々回は日にちだけでソートしていたんですが、今回は種類によってソートをかけておまして、このようなことをいたしましたということで、分野ごとに並んでおります。これを見ただけであれば、大体こういう内容をやっていたのかというのがわかっていただけたと思います。

大も小も兼ねて全部計算しますと、最後のところにありますが、全部で142件ほどやってきたということになります。

それから右側のところにいろいろな関わっていただいた団体とかを掲載させていただいておりますけれども、延べで47団体と何らかの形で連携をさせていただいたということになっております。

2ページ戻りまして、今後の予定です。下半期の大きな行事だけそこに挙げております。

まず11月3日に樹冠トレイル、今、2期の最後に残ったものですが、これのオープンをする予定であります。

それから、11月17日、18日、びわ博フェスティバルというのをやる予定です。これは、はしかけとか、フィールドレポーターの人たち中心に、いろんな発表をするという場になります。ちょうどこの日は「関西文化の日」にも当たりますので、たく

さんの人が来られるのではないかなと期待しております。

それから、12月ですが、先ほど研究部長のほうから話のありました合同セミナーがあります。それから、水田生物研究会等々ありまして、1月に入りますと、新琵琶湖学セミナーということで開催する予定であります。

最後のところに、広報・営業活動ということで挙げさせていただいております。広報に関しましては、この次の議題に入ってきておりますので、そちらのほうについては省略させていただきまして、営業活動について紹介させていただきます。

今回、リニューアルを進めているわけですがけれども、これは県だけのお金ではなくて、いろいろな方たちの協賛をいただいて、進めさせていただいております。いろいろ回ってまいりまして、平成27年から今年の8月までの累計で、寄附金を206社、8,631万円いただいたという形になっております。

それから、寄附をいただいたり、連携をするための仕組みというのを、そこに名前を挙げさせていただいております。

ちょっと説明をさせていただきますと、リニューアルサポーターというのは、リニューアルに賛同していただいて、ご寄附をくださるところ。

それから、1つ飛ばしまして、水槽サポーター、それからこれも1つ飛びますが、樹冠トレイルサポーターというのは、樹冠トレイルの運営にご協力をいただくところとなっています。

メンバーシップ、それからキャンパスメンバーズで、それぞれ会社・団体、あるいは大学に団体会員のようなもので入っていただきまして、利用促進していこうという仕組みになっています。

それから、樹冠トレイルに関しましては、サポーターというのは、企業・団体さんを念頭に置いているんですが、個人の方からもという形で、現在、クラウドファンディングを進行中であります。

以上が今年度の活動の状況に関するものであります。

それから、もう一つ、議題(2)にありますのが、新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画、これは資料2としてまとめてあります。こちらのほうに関しましても、ご紹介させていただきたいと思っております。

資料のほうはあらかじめお配りさせていただいておりますので、目を通していただいているかと思うのですが、大変細かいので、全部読み上げていると、大変なことになりますので、要点として、こういう状況ですということを、1)から7)のどこ

ろに箇条書きにさせていただいております。

この行動計画というのは、5年間でどういう博物館になりたいかという目標を立ててやっていくというものなんですけれども、まず、展示空間、交流空間のリニューアルというのは、計画どおり進行しております。特に、今期、交流空間の更新ということで、新たな展示とか交流空間がどんどん開けてきているわけなんですけれども、そこにおける情報発信、それからサービス提供というのは、順次始めているという状況です。

それから、使いやすい博物館や外国語対応も順次進めているというところで、年度の途中ということもありますので、50%とか30%とか、そんな感じで進んでおります。

それから、参加しやすい博物館というところで、ポイントになりますのが、はしかけのグループを充実していこうというのをやっておりますけれども、あと3グループで目標達成というところまで来ております。それから、フィールドレポーターの活動をオンライン化していくということで、効率化していくというのもやっております。

それから、学校向けの新しい展示に即したガイドとかプログラムの開発ですが、これは議論が続きまして、なかなか進まなかったんですが、今年から遅ればせながら着手を始めまして、徐々に進行中ということになります。

それから、多様な連携というのが目標に掲げられておりますけれども、これは先ほどの平成30年度の活動実績を見ていただければわかりますように、いろんなところと実際やらせていただいております。

それから、資料関係ですが、漁具コレクションの国登録というのが昨年度行われました。これに合わせて次の春に展示を企画中であります。

それから、情報システム全体を昨年大幅に変更しました。それに従いまして、資料関係のデータベースも新しいシステムに移行したんですけれども、システムの移行は完了して、現在、ウェブで公開中であります。特に、図書の方も新しくなっております。

それから、研究は先ほど申し上げたとおりという形になっております。

報告は以上です。

○会長：ありがとうございます。

博物館というのはいろんな事業をやっていますので、一つ一つの事業について議論していくと、とてもじゃないけれども、時間が足りませんので、今、全般にわたってご報告をいただいた。特に、今年度の前半について詳しくご説明いただいた中で、皆

さん、それぞれの立場でお気づきになっていることとか、ご意見とか、どんなことでも結構ですので、自由に出していただければというふうに思います。

いかがでしょうか。

○委員：毎回思うんですけれども、すごい充実した内容だと思う反面、これは大変だろうなと本当に思います。上半期で142件、何かイベントをやっていたらということは、今、計算したんですけれども、週平均6件です。週に1日、閉館日がありますから、要するに、毎日、何か新しいことをやっていたらという計算になります。

目録を拝見したら、こちら、研究専念の職員の方が30人いらっしゃるということなので、しかし一つのイベントを1人で全部分業したとしても、5週に一遍、何か新しいことをやっているということになります。準備に2週間半、多分もったかかると思いますけれども、ということは、何か新しいこと、イベントを発信するために時間の大半をとられているんじゃないかと心配するんです。今回、枠組みでソートして、わかりやすくしてくださったということなんですが、次回でいいので、1人の人がある時間の中で、ここからここまでは何かイベントに携わっていた、ここからここまでは平常の業務なり、平常の研究に専念することができたという、人でソートした時間の割り振りをちょっと見える化していただけないでしょうか。これ、本当に僕、心配です。

この協議会みたいな場所というのは、みんながすごく喜んで、何かしたほうがいいですよ、あれしたほうがいいですよというわけですよ。したほうがいいという提案を聞かないのはすごく難しいんですね。やりませんと言うと、悪者になっちゃうから。でも、そういうのが積み重なっていくと、どっかで限界が来るので、もう一つ見える化してほしいことがあって、こういう資料は多分、毎回、用意されていると思うんですね。なので、過去何年にわたって、上半期、下半期ごとに一体何件のイベントをやってきたのか。それが増加傾向にあるのか、安定しているのか、減少傾向にあるのか、そしてそれに応じてスタッフの人数はどう変わっていったのか。つまり、一人一人の負担が単調増加的に発散して行って、危機的な状況にないのかどうかということを確認したいと思います。

○会長：ありがとうございます。

事務局のほう、いかがですか。

○事務局：貴重なご意見、ありがとうございます。

博物館の業務は本当に多岐多様にわたりまして、やり出したらどんどん、これはお

もしろい、あれをやろうと膨らむ一方で、スクラップ・アンド・ビルドができないという、そういう状況がここ20年、ひたすら走ってきたという現状だと思います。

それと反比例するがごとく、予算が削られているというところですので、そこで今、働き方改革が言われておりますけれども、実際どこに集中して、何を伸ばして、どういう博物館を目指すかというところが軸にあって、そのためにどれだけ人と時間をかけるかというようなことを精査しなければいけないというふうには考えております。

実際、先生の言われるように、やっぱり過去のデータと比較しながら、先をどう考えるかということをやりたいというふうに思います。ありがとうございました。

○委員：人の意見に水を差すのが、私、大好きでして、中川さんの言われたこと、あれ、やるだけでも大変だと思うんです。そうすると、仕事を増やしてしまう。私がスタッフだったら、何を言うかというふうに言ってしまうので、それよりかは、もう少し質をどうのこうのというふうにしたほうがいいかもしれない。さっきおっしゃったことは、やるだけでも大変だと思います。もし私がスタッフだったら、絶対やらない。

○会長：今、何を増やすとおっしゃったんですか。

○委員：いろいろ言われたこと、あれ、調べようと思ったら、大変ですよ。1人がかかった時間なんて、忘れていることを適当に書かないといけないわけですよ。それをやる必要があるのか。

○会長：委員のご心配というのはごもっともですし、実際、人的な資源なり、予算なりがふさわしい形で投入されているかどうかということについては説明していただく必要があるかなと、私も思うんです。ただ、余り現場にしわ寄せというか、手間が及ばないような形でお願いしたいとは思いますが。

いかがですか、館のほうは。

○館長：お二人のご意見、よくわかりますし、今全体に、例えば科研の申請なんかもそうですけど、選択と集中ということになっていきますので、委員がおっしゃるように、この中の仕事で本当に必要なことがどうかとか、そういうことを調べる上でも必要なことだと思います。中坊先生がおっしゃるのもよくわかるんですが、一度はやらなくちゃいけないかなというふうな覚悟で、今、時期が20周年が終わったところなので、今までのことがありますし、新しくリニューアルするという意味では、中の体制もいろいろなことを考えていかななくちゃいけないので、この機にリニューアルの一貫として、そういう選択と集中ということは、事業に関してもやっていかななくちゃならないだろうと思いますので、一回そういうことをやってみなくちゃいけないかなと、私自身は

そう思います。これは私どものほうでよく協議させていただいて、本当にものすごい労力がかかるようでしたら、ちょっとこの次に言いわけをするかもしれませんし、そういうふうにさせていただきたいなというふうに思います。

○委員：すみません、いいですか。

私、何が言いたいかといいますと、かかった時間をカウントするって、済んだことでどうしてカウントできるのかという、合理的なことを言っているわけで、初めから2年、3年後にそういうことをカウントするという前提でやるのであれば、イベントが済めば、今回は何時間かかった、誰がこうやったという記録をしていけばいいので、そんなものはコンピューターがありますから、簡単だと思うんです。済んだことで果たして計算ができるのかどうかという、どれに何時間、誰もわからない、そんなものは。

○館長：ですから、多分できることとできないことというのは、やればわかりますので、できなかった場合には、「すみません、できませんでした」と言いますので、そんなに労力をかけずにできることで、何かいい判断ができるような資料ができれば、つくってみたいと思います。

○委員：過ぎたことはいいと思うんですよ。何かイベントを打つときに、何月何日から何月何日まで、誰が委員だったとか、その程度のことでいいと思うんです。昔のことを掘り返すのは無理だというのは、私もそうだと思います。

それから、もう一つ、これもいつか言わなきゃいけないなと思っていたんですけど、協議会が何かしたほうがいいでしょうと、さっき僕自身がそれをやっちゃいましたけど、言うとは、それはプレッシャーでしょう。だから、協議会というものの位置づけをきちんとしたほうがいいかなと思っていて、多分、私たちの役割って、アドバイスであって、命令じゃないと思うんです。だから、話し合っていて、あの意見、ばかな意見だったなって行って却下されたら、それに対して文句は言わないという決意は必要かなと、私自身は思っています。

○会長：ありがとうございます。

最初からちょっと紛糾ぎみですけども、委員がおっしゃった中で、今年度の事業のリストで、新しい事業をこれだけというおっしゃり方をしていましたけれども、これは特段、新しいものだけをピックアップしているわけじゃなくて、ルーティーンな事業も含まれていますので、そこは事業によっては新しく立ち上げるものもありますけども、今までどおりで、そもそも負担にならないものも含まれているということは

あると思います。

それと、私も博物館で仕事をしてきた経験から言いますと、常設展のリニューアルというのは学芸員の人生の中でも1回あるかないかという、そういう大きなイベントです。そういう意味では、今、リニューアルの真っ最中ということで、これはふだんの状態ではないということですので、今の状態で研究がどれだけできているかというふうなことをデータ化しても、それは余り今後には役に立たないかなという、そういう気持ちがあります。

それでは、ほかの方、ご意見をお願いします。

○委員：この協議会は、第三者的に博物館を見てという話ですね。なので、今のお話にもあるように、まず運営する学芸員さんとかが大変だということで、うまくすみ分けて、ここの資料にもあるような、サポーターさんとか、いろんな方を巻き込んで、いろんな方に関わってもらって、この琵琶博を盛り上げていく。そして一方では、いろんな障壁をなくして、県民の方とにかくたくさん来ていただく、もしくはリピーターになって来ていただくということが、すごく重要になってくるかなと、いつも思っているんです。

それで、まず質問したいことは、資料1の2-7の広報・営業活動のところ、リニューアルサポーターとか、メンバーシップとか、水槽サポーターとか、いろいろ書かれているんですが、どのぐらいかで構わないので、前年比どのぐらい増えて、増えた手法というか、どんなふうを増やしていったらっしゃるのかということをお聞きしたい。以前、お話に出ていたキャンパスメンバーズという話で、滋賀県は大学がとて多い県で、でも何って、「そうですね、じゃ、そうしましょうか」という大学が少ないというお話が出ていた中で、1大学だったけれども、4大学増えて5大学になりました、こういうようなアプローチをして、日本経済新聞さんにちょっと後押しをしてもらって、大学にうんと言わせたとか、何かそんな手法があれば、ちょっと教えてほしいということと、クラウドファンディングが現在どういう状況にあるのかというのも教えてほしいです。

それと、いろいろなイベントの中で、企業が関わって、それもちっと違和感を感じるような、「伊藤園俳句フォトコンテスト作品展」という、フォトが自然の琵琶湖の風景だったのかもしれませんが、そういう企業を巻き込むというのは、すごくすてきなことだとなと思うので、もっと企業を巻き込んでいったらいいのではないかと。どのように企業を口説き落としかということも聞きたくて、それとびわこ成蹊スポ

ーツ大学とかには関わってもらっているんですけど、スポーツ大学に何を関わってもらったというところもちょっと知りたいところです。私もスポーツ大学に出入りしているんですが、琵琶湖博物館と関わっているのかと思っけていまして、そのところも教えてほしかったりします。

それで、トータル的にちょっと言わせていただくと、資料をもうちょっと前もって読みたかった。今日の午前中ぎりぎりに届いたので、封もあけずに、ここへきてあけたという状況なので、もうちょっと早く送ってほしいなという、ちょっと苦言を申し上げておきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

○会長：幾つか気になる点をご質問いただきましたけども、それは事務局のほうからお答え願ひます。

○事務局：資料が遅くなりましたこと、大変申しわけありませんでした。次からもっと早くやれるようにしたいと思ひます。

いろいろご提案いただきまして、まさにそのとおりでなというところなんですけれども、最初にありました企業連携とかのところの、何が何件で、お金が何という、余り細かいことを言うと、差し障りがあるかなというのもありますけれども、件数だけ申し上げておきますと、リニューアルサポーター103件ござひます。それから、水槽サポーターが91件という形で、樹冠トレイルサポーターはこれから始まるという状況です。

それから、先ほど申し上げましたメンバーシップとキャンパスメンバーズ、いずれも団体会員のようにして入っけていただいて、利用促進していただくというものですが、メンバーシップに関しては99社、または団体という形です。

それから、キャンパスメンバーズについては、今のところ、5つの大学ということで、ちょっと今、手元になんですけども、キャンパスメンバーズになったところの大学生もぼちぼちは来てくっけていているようです。

それから、先ほどびわこ成蹊スポーツ大学とかとどういふ関係がというお話ですが、すみません、これ……。

○委員：すみません、話を折って悪いんですけど、これは現在の数値ですよ。

○事務局：現在です。

○委員：前年と比べて、どんなふう膨れたかとか、同じだとかというのを知りたいんです。

○事務局：すみません、今申し上げたのは、全部通しての延べ数で、まずリニューアル

サポーターに関して言いますと、27年度が44、28年度が24、29年度が31という形で、でこぼこしております。30年度は上半期ですので、まだ4という状況になります。

メンバーシップに関しては、今年は上半期で17という形です。

それから、水槽サポーターは、5、23、43、今は20なんですけれども、今のところ、水槽は全部埋まっている状態です。

それから、大学に関しましては、昨年度から始まりまして……。去年、4つの大学が契約しまして、今年はプラス1という形になっております。少しずつ増えているような形ですね。

それから、いろいろなところとの連携というところで、企業を巻き込むというのがありました。実は伊藤園さんは昔から、「お茶で琵琶湖を美しく」というキャンペーンをやっていて、ヨシとかの保全の寄附金を県としていただいていますので、その一環として琵琶湖とか自然の楽しさを訴えようということで、フォトコンテストが始まりました。県と共催の形のコンテストとなっております。それを当館で展示させていただいたという形です。そういう形でいろいろつながりが出てくるといいなというのがあります。

それから、先ほどのびわこ成蹊スポーツ大学はどういうことだったんだろうかということなんです。実はこれ、かかわった機関とか団体というところを、頼まれたとき、それから協力したとき、ごっちゃにして入れていますので、この場合は、成蹊スポーツ大から「魚のゆりかご水田」の話をしてねということ……。

○委員：向こうに行った。

○事務局：向こうに行ったというか、向こうに説明をしたというような形になっています。ですから、そういう形で、こちらから提供した場合、それから例えば、「湖国もぐらの会」というのが展示のところに出ていますけれども、これはもぐらの会の方たちに来ていただいて、展示室でいろいろとお客さんを相手にやってくださったとか、そういう形も混在しております。

それから、クラウドファンディングに関しましては、広報課長のほうから申し上げます。

○事務局：私からはクラウドファンディングについて説明させていただきます。

9月3日からですので、2週間ほど経過しておりますが、クラウドファンディング自体は今10件、申し込みがあったところがございます。金額にして、10万円ぐら

이었다かと記憶しております。

それから、クラウドファンディングについては、インターネットでお申し込みいただく形になっておりまして、インターネットは使い勝手が悪いとおっしゃる方もいらっしゃいますので、現在、納付書によって寄附を申し込むような方法について、準備を進めている最中でございます。また、来館者の方にチラシをお配りして、その裏面の申込書を用いて申し込んでいただいているのが、現在、7件ぐらいあるというように聞いております。こうしたクラウドファンディングと併せて、納付書を使った個人寄付、そうしたものについても幅広く周知することによって、今後、樹冠トレイルを応援していただく方を増やしてまいりたいと考えているところでございます。

それから、1点だけ、企業連携の関係で補足させていただきます。

伊藤園さんもございましたけれども、営業活動といっても、単純に寄附金だけを募って歩くばかりでは、企業に対してメリットが余りないということもございますので、こちらとしては、例えば企業さんのほうで、今、CSR活動を活発にされているので、そうした活動を館でパネルを設置して発信していただく場を提供しているところでございます。また、企業さんのほうでの社内研修等に博物館から学芸員を講師として派遣するなど、企業さんとの連携という形で進めているところでございます。

○事務局：多分、クラウドファンディングは皆様の資料の中に、チラシを入れさせていただいていると思いますので、またごらんください。

○会長：関連ですか。

○委員：ちょっとだけ。単純なことなんですけど、特定の企業の名前を冠したフォトコンテストということで、ちょっとひっかかりを覚えるんですけども、滋賀県県民、あるいはほかの方で、滋賀県立琵琶湖博物館というところで特定の企業の名前を冠したイベントをやるということに対して抵抗を感じる人はいらっしゃらないでしょうか。

○事務局：もともとのフォトコンテストの名前に特定の企業名が頭についていたというのがあるんですが、その辺はどきどきしながら、もう4回目をやりましたけれども、とりあえずおかしいというご指摘は受けておりません。

○委員：コメントもないですか。

○事務局：はい。

○委員：企業というのは極端に言うと、余裕のあるところは本当に社会的なことも考えるんですけども、余裕のないところというのは何をするかわからないという怖さを、実は私、持っています、余裕のあるところは本当にやってくれるんですよ。計算

なしに度外視で、社会活動をやってくれることはありますけども、そうでないときというのは、しんどいものがあるなど、私、いつも思っているんですけど、県民から見たときに、伊藤園という名前を滋賀県立博物館で見ることにに対する抵抗感というか、そういうものというのではないのでしょうか。

私、何となくひっかかりを覚えるんですけども。ちょっとこれは厳密過ぎる感性かもわからないんですけども、そんな感性を持っている人が少なくともここにいますので、ちょっとお考えいただければなということを思います。もちろん、企業の援助というものがないと、県立のこういう施設というのは運営もできませんし、今、県からのお金というのは、恐らくかなりシビアな状況だとは思うんですけども、前にうちの京大の博物館で菓の展示をしたときに、誰がどうしたのか、Aという商品をぽっと置いた人がおるんです。それをテレビで、京大の博物館でこれはどうかというのを流されまして、その担当者は実は私でして、痛い思いをした覚えがありますので、そのところのチェックというのは厳密にお考えいただいたほうがいいのかなということは思います。痛い思いをした者が言っていますので。外の方は企業がどうこうで、援助してもらって、これはええなあということを持っている人が、全部が全部そうでないと私は思います。

県立というのはやはり、フェアで公平性を保っていて、県立というイメージで恐らく見ていると思いますので、私、ちょっとひっかかりを覚えました。

○館長：ご指摘のこの問題につきましては考えさせていただきますけれども、もともとこれ、県と伊藤園の間で、協定を結んでいて、琵琶湖をきれいにするという、その一環でこちらに流れてきているという側面があるのが1つと、それから今、ネーミングライツの問題というのもあるんですけども、企業銘板なんかは出していますよね。ですから、その辺については考えていかなくちゃいけないことがあるんですけども、企業がここを使うことができるという権利のときに名前を出すことができるかどうかということですね。琵琶湖博物館の応援があって、例えばいろいろな企業の研修をやるときにも、名前を出すかどうかという問題にもなってきますので、その辺は今、我々のほうも企業・団体の営業活動で寄附金を募っていますけれども、そういう場合にはどうするのかということも含めて、今後考えさせていただきたいと思います。

○委員：銘板はいいと思うんですけど、目立つ形でやり過ぎるのはどうかということです。

○会長：議論を深めたいんですけども、ちょっとこの話ばかりしていると、この議題

に割り当てられている時間がもう既に過ぎておりますので、発言は手短にお願いしたいのと、ほかの方の発言を受け付けたいと思います。

○委員：ちょっと話が後に戻ってしまうんですけど、キャンパスメンバーズ、5大学とあるんですけど、その5大学は何なのかなというのを伺いたいのと、その大学もこちらからアプローチをかけたところと、向こうからがあるというふうなお話だったんですが、交流のある大学の中に、滋賀大学という名前が出てこないんです。それはなぜなのかなと思ってまして、私、ここに入ってきたときに、小学生の団体が何校もあって、みんな楽しそうに見学していました。実はうちの娘も滋賀大学に通ってまして、ぜひ、やっぱりこういう博物館で何ができるのかとか、どんなふうになれば、子どもたちにいろんなことを学んでもらえるかというのを、もちろん学校の先生方もいらっしゃいますし、あれなんですけども、知ってほしいと思っているんです。ぜひ、滋賀大学という名前があってほしいなと思うんですけど、そこら辺はいかがでしょうか。

○館長：当然のことながら、大体、今、県内にある大学と連携はやっています、連携協定を結んで、いろいろやっているんですけども、県内の大学はすべて回りました。滋賀大学はお断わりされました。2回行きました。大きな大学は、なかなか難しい。組織があって、そんなことはできないと。今、私たちのほうは、学部とでもできるというふうな形で進めているんです。今、言ったのは、5つの大学のうち、県立大と、あとは短大です。

○会長：ほかにいかがでしょうか。

○委員：先ほどの企業との特別なというお話なんですけども、弊社も企業として今日は参加させていただいているんですけども、私たちは今、地域連携で地元の企業と連携して、トンボを通じた保全活動ということで、博物館の方にもアドバイスをいただいているんですね。そういった発表の場をこちらの博物館でさせていただけないかということを持ちかけて、させていただこうと思っているんですけども、特定のというか、内容にもよると思うんですね。企業として何か商品のPRとか、そういったものになると、それはいけないと思うんですけども、内容によってはいいのではないかなという思いがあるんですけども。

○委員：私が言いたいのは、そういうことではなくて、企業として連携するにしても、いかにうまくオブラートをかけて隠すかという、それで出すかという、それで表面に出すことと出さないことで、出し方が問題やと思っているんです。下手に出すと、印

象が悪くなる。難しいと思うんですよ。

○委員：それは難しいと思います。でも、取り上げ方だと思うんですけども。

○委員：もちろん。

○委員：私も今回、この琵琶湖博物館に携わらせていただいて、企業と博物館と連携して、滋賀県を保全するというので、すごくすばらしい活動だと思っているんですけども……。

○委員：大事なことなんですけど、その大事なことが表に出たときに、企業の色がついてしまって、県民がどういうイメージを受けるかという、そこなんですよ。

○委員：そうですね。ただ、5年間やられてきて、何もそういうご意見がないということとは、そんなに悪い印象ではないのではないのかなと思うんですけども。

○委員：タイガースが企業名の付いた帽子をかぶっているのとは、ちょっと違うんですね。

○委員：でも、それではないと思うんです、ちょっと違うと思います。

○委員：違います。だから、これは本当に県立で公のもので、どこにも色がついていないという前提のもとに、閲覧者が来るとします。そういうときに、企業の援助ってすごく大事なんですけども、表現の仕方だと思うんですね。

○委員：援助があったからなのか、なくても多分、琵琶湖博物館さんは受け入れられると思うんですけども。

○委員：いや、あったほうがいいですよ、やっぱり。お金はたくさんあったほうが、いろんなことができますもん。当然のことですよ。

○委員：援助云々という話ではないような気がするんですけど。

○委員：援助でもいいと思うんですよ。当然、援助でもいいし、あるいはコラボレーション、これが理想なんですけど、やっているうちにどうなっていくかというのは、これは動いていきますので、何とも言えないですね。とりあえず、やってみるんですけども、ただ表現したときに、ぼんと企業名が出ちゃいますと、誤解を受ける人がいるかなという、それなんです、私が言いたいことは。コラボは当然必要ですし、ええことやと思うんですけども、拒絶する方向で言うているんじゃないかと、表現の仕方です。

○委員：フォトコンテストぐらいなら、そこから会社が得することもないような気がしますけどね。

○委員：それを県民がどう思うかですよ。

○委員：そうですね。

- 委員：こんなものだったら大丈夫だと思うのは、やるほうの勝手であって、受け取る側はどういうイメージを持つか、わからない。
- 委員：その辺は博物館の方も内容を精査されて、受け入れられているんだと思うんですけど。
- 委員：でも、博物館はやる側ですよ。大多数が県民という、一般大衆がいるわけですよ。一般大衆ほど怖いものがないと私は思っているのです。
- 委員：十人十色で、いろんなご意見があるかと思えますし、全部が全部ではないと思えますけど。
- 会長：この場では委員のほうから、そういう懸念が出されたということで、館のほうで受けとめていただいて、広報課になるんですか、そういったところで整理をいただいて、ガイドラインみたいなをつくるなり、わかりやすい形で、企業さんも参加しやすいような形を整えていただければというふうに思いますので、ちょっと宿題にしておきたいと思えます。
- 委員：大きい宿題ですね。
- 会長：時間も経過していますので、とりあえず、次の議題に移りまして、今の議題について思い出したことがあれば、後ほど時間があれば議論したいと思えます。

(3) 来館者を増やす取組について

- 会長：では、続きまして、来館者を増やす取組について、事務局のほうからご説明をお願いします。資料3です。
- 事務局：広報営業課の梅村でございます。パワーポイントで説明させていただきます。私から、来館者を増やす取組についてご説明させていただきます。
- 資料3をご覧ください。
- 年間来館者数をお手元の資料のグラフでお示しさせていただいておりますが、平成21年度以降は、おおよそ30万人台で推移いたしておりましたが、第1期リニューアルを実施した平成28年度が46万人、それから昨年がリニューアルの谷間ということもありまして、41万人でした。本年度は、目標人数が57万人のところ、現在、8月末で23万人と苦戦している状況でございます。
- 続きまして、目標達成のための方針と実施状況についてご説明させていただきます。
- まず、県内と比べますと、当博物館の認知度が低い県外、特に京阪神をターゲットに認知度向上の取組を実施いたしております。

今年度は、博物館の魅力を伝えるために、リニューアルを機に体験・体感ということを出し、「～できる博物館」というものをテーマとして発信しているところでございます。

お手元の資料、まず1番目、交通広告といたしましてデジタルサイネージ、JR京都駅の地下のところ、こちらにはゴールデンウィークの4月23日から1週間掲示したところでございます。また、同じ京都駅の付近、こちらは京都市営地下鉄のコトチカビジョン、こちらにつきましては夏休み前、7月16日から1週間、広告したところでございます。

それから、2番目にWEB広告といたしまして、検索サイトのバナー広告や検索用語に応じた広告、そうしたものを4月23日から5月7日のゴールデンウィークの期間に実施いたしました。

それから、インターネットを活用したニュース配信として、びわ湖カレーや企画展示、これは今行っている企画展示の内容です。それから2期のリニューアル、それから先ほどもございましたように、57年ぶりに新種のタニガワナマズが発見されたという、こういった内容を発信いたしまして、全国のニュース記事に掲載されたところでございます。

それから、テレビの番組の取材誘致でございますが、テレビ大阪の「やさしいニュース」、こちらについては、自由研究スポットということで取り上げていただきました。

それから、続いて、KBS京都の「news フェイス」、こちらについてはリニューアルをテーマに取り上げていただいたところでございます。

それから、サンテレビの「サンぷん！」こちらについても同じくリニューアルを取り上げていただいたところでございます。

そのほかにも、関西テレビの「FNNプライムニュースデイズ」、こちらのほうではタニガワナマズの関係で取り上げていただいています。

それから、「しがトコ」の番組プロモーションでございますが、こちらにつきましては、滋賀ナンバーワンのローカルメディアでございます「しがトコ」でございますけれども、こちらでびわ湖カレーやリニューアルをテーマとして記事を展開していただいたところでございます。

それから、インターネットの記事の配信といたしまして、旅行系のサイトにリニューアルの記事を配信いただいたところでございます。

また、子どもとお出かけの情報サイトに、リニューアルをテーマとして記事を配信いたしましたところでございます。

ほかには、「おおさか子ども元気アップ新聞」——資料3のところにカラーのバイカルアザラシの写真がございますが、こちらは大阪府下の小学校に51万部余りを夏休み前に、「おおさか子ども元気アップ新聞」というのが配られるんですが、そちらのほうに広告を掲載させていただいたものでございます。

ほか、11月には新聞の折込広告を予定しているところでございます。

続いて、2番目にリニューアル・イベント等の集中広報といたしまして、資料提供等を随時実施しているところございまして、こちらにつきましては、8月末現在で19件実施しております。

また、リニューアルの内覧会につきましては、7月のおとなのディスカバリー、ディスカバリールームのオープンの内覧会については21社、マスコミの方等にお越しいただいたところでございます。

それから、テレビ・ラジオ等、直営業を行っておりまして、1つが朝日新聞の夏の高校野球特集号がございますが、そこに広告記事、リニューアルを対象に載せていただいたところございましたし、またタニガワナマズの件では、MBSの「VOICE」でも取り上げていただいたところございます。

また、先ほど企業連携の話もございましたけれども、企業訪問の際には、必ず資料とともにポスター等も持参して、人が多く集まるところにポスターを張るようお願いして、周知を依頼しているところでございます。

また、今週末にもございますが、イナズマロックとの連携ということで、こちらのほうでは無料ブースを出展いたしまして、PRに努めているところでございます。

それから、関西広域連合との連携で「うみのこ」の体験事業。こちらにつきましては、本年8月11日に実施いたしましたところですが、44名が参加いただいたところでございます。

続きまして3番目、リピーターの獲得に向けた県内での認知度の再向上の取組でございます。

まず、地元草津市へ新しく転入された新住民への働きかけとしましては、夏休み前にチラシを配布して、リニューアルを広報させていただいたところでございます。

また、草津市との連携では、子育てサイトへのイベント情報の掲載や、子育てNPOとの連携ということで、広報やイベントなどを通じて実施しているところござい

ます。

また、草津市の観光案内所、これは草津駅にございますが、そちらで博物館方面への案内表示を行っていただいたところでございます。

また、各種イベントへの移動博の参加。移動博と申しまして、博物館のキットがございますが、そういったものを活用いたしまして、各種イベント等で博物館の広報をいたしております。

また、県内のリゾートホテル、宿泊施設等へチラシを発送いたしまして、配架の依頼をお願いしているところでございます。

学校等の連携といたしましては、県内の小学校へ訪問して、来館の依頼をしているところでございます。昨年度、小学校で本博物館にお越しいただけなかったのが63校ございましたが、今年度はそのうちの24校が来館いただけることとなっております。

また、学習船「うみのこ」の寄港誘致。本年度は1航海2校が来館いただく予定でございましたけれども、琵琶湖の水位の関係でお越しいただくことができませんでしたが、引き続き、来館いただくよう働きかけているところでございます。また、「うみのこ」と博物館との通信学習も行っているところでございます。

最後の項目には、4月～8月までの来館者の年度別の内訳を掲載いたしております。

個人の来館者は増加傾向にあるものの、団体、特に一般の来館者が伸び悩んでいるというのがごらんいただけると思います。そのため、旅行会社に働きかけて、団体客の誘致にも取り組んでいるところでございます。

これから11月には、第2期リニューアルのトリを務める樹冠トレイルのオープンを予定しているところでございますが、これを機に、より一層の情報発信に努め、リニューアルによって博物館の新しい魅力をPRするとともに、これまで博物館が培ってきた固有の魅力も改めて発信してまいります。現状、さまざまな方策を打ってはいるんですけども、なかなか結果として出ていない中、これから年度後半に向けて、より多くの方にお越しいただけるよう、委員各位にはご協力を賜るとともに、それぞれの分野からお知恵を拝借できれば幸いです。どうぞ本日はよろしく願いいたします。

○会長：ということで、入館者増について、各委員それぞれの立場から提案をいただきたいというリクエストです。今のご報告で、館としては手を尽くして、これだけのことをやっているという項目が挙がっています。それぞれやってみて、どうだったかと

いうところ辺の検証もできたら欲しいところなんですけども、それはさておきまして、このほかにこういうことをしたらどうか、あるいはここに出ている項目の中でも、もっとここら辺は強めたらどうかとか、いろいろご意見をお聞きしたいというのが、この議題でございます。

○委員：今年度の目標は57万人ということなんですけど、これはどうやって決められたんですか。

○事務局：これにつきましては、博物館のリニューアルの計画、創造基本計画がございましたが、その際に、ほかの館のリニューアルの状況とかも踏まえて、目標を算出させていただきました。

○委員：なるべく多くと思っちゃうと、すごくしんどいと思うんですよ。だから、イチローの200本みたいに、もうこれでいいという線があったほうがいいかなと、長期的には思うんですけど。それを大幅を超えるようだったら、むしろ値段を上げて、財政を潤したほうがいいのかという考え方はだめなんですか。

○会長：ありがとうございます。

○事務局：当館の性格上、やはり多くの方にお越しいただいて、環境学習も含めての理念を広げたいということもございまして、それから当初説明させていただきましたように、30万人台で推移しているものを、その水準をリニューアルによって引き上げるということで、2020年以降は60万人を目標ということがございます。できるだけそこに近づけるように、このリニューアルのタイミングで発信して、そこを引き上げることによって、それ以降もさまざまな取組をやっていかないと、リニューアルが一時的な人数の増加につながるだけでは元も子もない。その後の取組につなげるためにも、ここでテコ入れして引き上げたいというように考えているところでございます。

○会長：目標の設定につきましては、いろいろ設置者からの意見もありますでしょうし、こういう既に創造基本計画の中で57万人という設定がされているという中で、どう実現するかということが、今日の議題ではあるんですけど、本当にこの館にとっての適正な来館者数というのはどうあるべきかということは、もし機会があればしっかりと議論をしていくべきかなと。例えば、アクセスの問題もありますから、アクセスもこの現状のままでどこまで期待できるのかというふうなこともあるんじゃないかというふうに思ったりはしているところです。

ということで、何か来館者増対策。

○委員：とてもすごい営業をしておられるなという感じはするんですけども、聞き間違っていたら失礼しますが、大阪の小学校にピラを配付したと言っていましたか。

○事務局：新聞です。大阪の教育委員会から毎日新聞が提供して、夏休み前に「おおさか子ども元気アップ新聞」ということで、各小学校を通じて、それぞれの生徒さんに配って、それが51万部ということです。

○委員：ありがとうございます。

それは載ったので、うちのお金は使っていない感じですか。

○事務局：いや、使っています。

○委員：使っていますか。広く近畿、全国に誇れる琵琶博であってほしいとは思いますが、やっぱり県内の小中高、もちろん大学、今、橋詰さんがおっしゃったように、大学生にこそ、もし教員になれるんならというような、先々を考えた琵琶博の見方、小学生なら小学生なりの見方、中学生なら中学生、大学生は大学生で、自分が就職した後に、先生になったら、こんなふうに見せてやろうかなとかいうようなところを持ってもらうための琵琶湖博物館でもあってほしいなと思うところがあって、地元のアプローチはどんなふうになっているのかなというのと、それとちょっとこれはハテナなんですけど、イナズマロックにお見えになる方に半額券とかを配っても、恐らく無駄だと私は思います。それはもう西川君を見に来るだけの人ですので、もちろんそれはリピーターになってくださっているんで、お金も落としてくださるし、すごくありがたいファンの方たちだと思いますけど、それが滋賀県の横に広がるとは、ちょっと私は思わない。

それと、草津市との連携をとめてくださっているんですが、先ほどの話を蒸し返すようですけども、私は企業とむしろ癒着してもいいと思います、極端な話ですね。それが、1社だけが突出するから、何かすごく目立つだけで、ほかの企業さんもぼんぼんぼん琵琶湖を美しく、僕らも協力しますって手が挙がってきたら、どこが挙がっているかわからなくなってくるし、主婦目線で見れば、私、今、初めて知ったんです、それを聞いたからこそ。琵琶湖を美しくするキャンペーンをしているお茶やわって、私は思いました。でも、それぐらいの何か主婦層というか、庶民って、案外そんなものなので、別にそれはいいと思うんですね。もっともっと企業さんが、すごい頑張って、琵琶湖博物館、もしくは琵琶湖に対して保全で頑張っているのは、どんどん名前を出していったらいいと思います。そしたら、ほかの企業も、そういうことを

社会貢献としてうちもやらなあかんの違うかって、腰を上げてくれることにもなる。私は障害部門なので、障害者雇用につながっていったり、もっと社会的な貢献をしていかなあかん、何か物をつくっているだけじゃあかん、もうけだけじゃあかんというような発想に変わっていく起爆剤になるのが、やっぱり新聞かなと思うので、どんどん書いていただいて、そこで何か変なことを考えていて、何か悪いことをしたら、それも新聞に載せていただいて、たたきにたたきみたいなのをしていただくと、やっぱりせっけん運動でいろんなことが行われてきた琵琶湖、滋賀県なので、企業はもっと名前をどんどん出すべきだと私は思います。こんなふうにやっています、こんな貢献をしていますと。そして、同業社もいらっしゃると思うので、うちだけやったら力足りないし、みんなもませんかみたいに言うてくれて、力になってくださると思うので、それは本当に表彰状を出してもいいぐらいだと思います。

障害者雇用をすごい頑張ってくださっている企業さんは、表彰式がありますので、それは売名行為と言ってもいいぐらい、定着はなかなかしないんですけど、ばんばん雇用します。それで名前がぐっと上がって、看板がぼーんと出ますけど、定着せずにやめていくんですよ、障害者の人は。ということもありますし、ただ草津市との連携が余り突出すると、それこそ県立なので、ほかの市とも連携をもっとしてほしいなというのがあります。

それと、旅行社さんに動員のお手伝いをさせていただくというのもいいんですけど、何かアプローチの矢印として、私がここに初めて来たのは、自治会のバス旅行でした。2回目に来たのは、子ども会でした。なので、そういう自治組織にもうちちょっとアプローチしたらどうかなって。自治会さんも、どこへ行ったもんかなって。それで一回営業したときに、ああ、琵琶湖博物館、昔、何十年前やったか、行った。できたころに行ったわと言っても、リニューアルしたんですよと言ったら、そしたら、もう一回行こうかしら、顔ぶれも変わったしみたいな感じで動く自治会もあるし、子ども会なんかやったら、子どもはどんどん変わるわけですし、毎年変わってもいいわけです。それと狙い目は老人会。とても力もあるし、時間もあるし、暇もありますので、何かそれこそ半額にしますよとか、こういう案内の人をつけます、学芸員さんも1人ついてくれます、おもしろいですよというような営業があれば、動いてくれる人たちだと私は思います。

それと、最後に質問は、大分前に、このバスの便が悪いという話が出ていて、そのことが何も触れられていないので、それだけちょっと何かこういうふうに努力をし

たけど、けんもほろろだったとか、こんな話までいってますとか、バスの本数を増やす問題が前にあったんですけど、なかなか来にくい。個人、マイカーだけの方ではなくて、バスで来れる方という話のお返事をください。お願いします。

○会長：ありがとうございます。

どうぞ。

○事務局：何点か私のほうからご説明させていただきます。

まず学校との連携につきましては、まず小学校との連携を主に重点を置いてやらせていただいています。というのは、やはり子どものときに博物館を体験して、ファンになっていただけると、後々まで来ていただけると。それから、やはり環境学習等の入り口として、低い年代のころから、そういったことに関心を持っていただく、博物館に親しみを持っていただく。こういうことを含めて、小学校を訪問して、学校として来ていただけるように働きかけるということでございます。

それから、企業連携につきましては、ご寄附をいただいているということもございますので、県から感謝状を贈呈させていただいております。

先ほども少し触れましたが、企業連携と申すからには、寄附いただくだけではなく企業様のほうでも、例えばビオトープを設置されたり、希少生物の増殖等に力を入れられるということもございますので、そういった取組等、CSRの発信なども含めて、当館と協力しながらやっていければと思っているところでございます。

それから、イナズマロックにつきましては、ご指摘のとおり、今週もございますけれども、イナズマロックに来られる方はコンサートを見に来られるので、こちらに来られるとは思ってないです。ただ、これは滋賀県ではなくて全国から来られる。しかも烏丸半島に来られるということで、烏丸半島に琵琶湖博物館というところがあって、こういう取組をやっているということを知っていただくだけでも値打ちがあるのではないかと。あわよくば、次の機会に寄っていただくとか、地元へ帰ったときに、こんなところがあったというふうに触れていただけるとか、何か少しでもとっかかりになればと考えているところでございまして、ブースを出してPRをしているんですけども、そういう夏フェスみたいなものについては、全部が自分のお目当てのアーティストばかりではなく、また時間も長いので、例えば食事に行くとか、トイレに行くとか、休憩に行くとかいうことで会場を離れられる方もいらっしゃいますので、そういった方に向けても発信する。

あと、極端な話、トイレの列が長いから、トイレを借りに来られるとか、雨宿りに

来られるとか、どんな形でも、せっかく烏丸半島でやっていただいているので、博物館を知っていただくことによって、特に県外の方に知っていただけたらという思いが
ございます。

それから、バスの便につきましては、近江鉄道のほうに働きかけまして、夏休み等
の繁忙期については、バスの増便を依頼しているところでございます。

草津市との連携等につきましては、企画調整課長からご説明をさせていただきます。

○事務局：ちょっとトーンの違う言い方をしていこうかなと思うんですが、とにかくた
くさんの人に来てもらうには、いろんな人に知ってもらいたいと思うことで、空中
戦として広い範囲にテレビに出たり、新聞に出たりということと、県内では地上戦と
して足で回るといっているのをやっております。私と田中補佐とかは地上戦をやっている
んですけれども、草津市、何で草津市やという話なんですけれども、たまたま草津市の地
元の子育てNPOの人とかと知り合う機会がありまして、聞いたら、新住民の人は、
琵琶湖博物館をあんまり知らないよと。それどころか、草津市から琵琶湖まで近いと
思っていない。すごい遠いと思っていて、琵琶湖すら見に行ったことがないみたいなこ
とを聞きました。その辺から始まりまして、そうか、琵琶湖博物館、20年たっ
て、こんなに新しく来た人には知られてないんだなということで、改めてやろう
と思ったというのが地上戦の話になります。

その中で、顔が見えない。見えると、宣伝してあげようかなという気にもなるよみ
たいなのがありますので、できるだけ顔が見えるようにしてやっていっていると。今、
そういうところで、草津市の人たちとたまたまできましたし、草津市役所とかは、地
元ということでアクセスしやすいのでやっているんですけれども、私たちとして、こ
から先を知りたいところは、じゃ、草津市だけではだめだというのは、先ほどおっ
しゃったとおりで、そうしたいわけなんです、じゃ、どうやって広げていったらやれ
るか。滋賀県じゅうの子育てNPOのお母さんたちと友達になるというのは、なかな
か至難の業だとは思いますが、そういったところで委員さんの中にもそちらの
方面の方もいらっしゃいますので、アドバイスをいただけたらと思います。

あるいは、ちょっと大学の話がありましたけれども、大学生というのは、誰かがおっ
しゃいましたが、世界中の博物館で大学生が一番博物館に行かないみたいなものがある
んですけれども、キャンパスメンバーズ制度をつくっても、なかなか来ないんですが、
1つだけ、博物館に生徒を誘導する方法があるというのを聞いたことがあるんですけ
れども、何かというと、教授が「あそこ、おもしろいから行ってこい」と言ったら行

くというんですが、じゃ、教授をそういうふうにするには一体どうしたらいいんだろうとか、あるいは、もっと全体的なトレンドとかの中でどうやっていったらいいのかなというところで、皆さん、それぞれ専門の分野の方ですので、アドバイスをいただけたらというふうに思っております。

まず、一番私の関心のあるところとしては、新住民の若い親御さん世代にアプローチするのにどうしたらいいかということをおアドバイスいただけたらというふうに思っています。

○会長：投げかけをいただきましたが、今回、メディアという立場でこの議題について、ぜひコメントをいただきたいと思います。

○委員：初めて参加させていただくので、あれなんですけれども、ここの博物館には多分、県内の小学生、中学生、高校生がかなり来ていると思うんですけれども、来た学生たちが多分こんな感じで、小学生から、ありがとうございましたという手紙が来た中で、そういう子どもたちが、多分20年間ずっとつながる、たくさん積もってきているんですけども、例えばそういう人たちを10年後に何かフォローするとか、5年後に高校生をフォローして何とかするとか、そういううまく組織づくりというんですか、そういうのができてくるといいのかな。せっかく来てもらって、高校生ぐらいだとメールアドレスがあるから、琵琶湖博物館からこんなことを情報発信するので、メール会員になりませんかとかいう形にしておいて、そういう人たちを組織化していくというのを、せっかく来てもらっているんだから、やったらいいんじゃないかなというのをちょっと思うところがありますよね。

それともう一つ、私が滋賀に来て、まだ1年半か2年ぐらいなんですけれども、琵琶湖博物館の「キラーコンテンツ」って何なんですか。そこをちょっと教えていただきたい。

○会長：「キラーコンテンツ」というキーワードですが、どういう意味ですか。

○委員：いろんな意味で、琵琶湖博物館はこれですというようなやつ。例えばこれできくと、このデジタルサイネージをやったり、電車に広告とかを出すときに、琵琶湖博物館って何なのかなというのが一目でわかるように、キャッチフレーズみたいなものがあるのか。いわゆる環境なのか、何なのかなというところなんです。あるいは、博物館の人たちが、これがうちの売りですよみたいな形というんですか、そういうのは何なんでしょう。キャッチですね。

○事務局：実は、「キラーコンテンツ」というのが一番苦しんでいるところでありまし

て、例えば旭山動物園であれば、「ペンギンが空をとぶ」と言えば、もうそれで想像できます。あるいは、福井の恐竜博物館であれば、「日本一、恐竜の骨がある」と言えば来るんですが、琵琶湖博物館の魅力は何だろうといったときに、何でもあることかなみたいな。あるいは、体験・体感かな。でも、体験・体感かなというのほどこでもそうだよなみたいなところで、非常に困っているところです。

今年、その中で広告会社のほうから提案いただいた「～できる博物館」ということで、いろんな「できる」がいっぱい詰まってるというのを一つのテーマにはしているんですが、キラーかという、どうだろうということで、逆に外から見たら、うちのキラーコンテンツって何なんだろうかというのをちょっと聞いてみたいなと思ったりしています。

○委員：多分、その辺が次の集客を増やす意味でのキーワードになってくる、取組になってくるんじゃないかなというのが、個人的に一県民としての考えです。その辺を考えることによって、お客さんもやっぱりそれを目指して来てくれるというようなところになるのかなと思います。これで言うと、今の項目は、人をどう増やすかということですね。

あとは、私たちメディアも一生懸命広報活動というんですか、いいことはちゃんと取り上げて、きちっとリニューアルしたときには、リニューアルして、こういうことをしますよという形で書いていくし、テレビも新聞もそういう形でやっていくと思いますので、そういう歩調を合わせながらも、私たちがそのときに何を報道していいのかということですね。見出しを何にしていくのか。そこがぴったり見出しが来れば、原稿も書きやすいし、伝わりやすいと思うので、その辺を意図的に考えていただければという感じです。

○委員：今、この辺でぼそぼそと話し声がしていたんですけど、恐竜博のキラーコンテンツは恐竜です。それはわかりやすい。琵琶湖博ですから、琵琶湖に魅力があるんだという信念の上にしか成り立たないんじゃないですか。僕が研究している古気候学もそこですよ。ぱっと見てわからないけれども、ちゃんと調べれば魅力がある、それを掘り起こすのが研究でしょ。それをちゃんと発信するのが琵琶湖博じゃないんですか。その軸足がぶれたら、もう成り立たないと思いますよ、本当に。

○委員：琵琶湖。

○委員：琵琶湖ですよ。「できる」ももちろんいいけど、何ができるか。その根幹はやっぱり琵琶湖ですよ。そのことの魅力を全員が信じる、その決意の強さによってしか

人を巻き込むことなんてできないんじゃないですか。

○委員：特に、近畿に住んでいたら、湖って琵琶湖ですよ。

○委員：だって、大事な水がめですのね。

○委員：それだけじゃなくて、やっぱりシンボルですよ。

○委員：あと、もう一個あるんだけど、いいか。

○会長：ほかの方、いかがですか。

○委員：小学校の校長会の代表ということで来ています。

小学生たちが大変たくさんお世話になって、本当にありがたいなと思っていますし、リニューアルをして、昼食会場ですか、ちょっと開放していただいたということで、割と計画が立てやすくなったというところがあって、そのあたりは大変ありがたいなというふうに思っています。

それから、広報活動についても、理科の支部長をしているんですけど、県の理科の支部長会なんかにも来ていただいて、いろんな広報活動をしていただいている部分かありますので、そのあたりが、そういう関係のものはわかるんですが、郡市の校長会などでは、こういう冊子が配られるんですけども、もうちょっと魅力を伝えるというか、その部分も、もし時間があってしていただけると、それぞれの校長が持って帰って、また学校で広げることができるのかなというふうなことを思ったりしています。

それから、4番に書いている「うみのこ」との連携ですね。せっかく「うみのこ」が新しくなったので、ここに寄るとか、ここでの活動を入れるのは非常に大事なことかなと思うし、同じ県の機関ですので、ぜひとも今年、何か1航海と言っていますけれど、積極的に進めていただければなというふうなことを思っています。

それと、この前、サスペンスを見ていたら、琵琶湖博物館がちらっと映っていました。たしか1週間か2週間前にあったと思うんですけど。

○委員：近江博物館だったかな。県もそういうロケーションというんですか、そういうあたりで力を入れている部分もあるし、そういうところにちらっと何か魅力的な部分があるなど。どこやというと、琵琶湖博物館が出ているというのだけでも、大分啓発の効果があるのかなと思うので、積極的にぜひ進めてほしいなと思います。

○会長：ありがとうございます。

事務局、ありますか。

○事務局：ありがとうございます。

校長会のほうを通じまして、また取組のほうを強化してまいりたいと思います。

それから、「うみのこ」につきましては、現在、第Ⅱ期航海計画作成会議のほうにも出席させていただいて、博物館利用について説明の上で寄港を依頼している最中ですので、せっかくですので、ぜひ烏丸半島に寄港していただけるように取組のほうを強化してまいりたいと思います。

それから、先週、「遺留捜査」をごらんになっていただけたようで、ありがとうございます。やっぱりテレビは単価が高いので、なかなか取組としては難しいんですけども、ビジターズビューローとか、あと県の広報課を通じて、いろんな番組で取り上げていただいたり、ロケ等で使っていただくように働きかけているところです。9月30日にはBBCで1時間番組が放送され、琵琶湖博物館を中心に、琵琶湖についての特集の番組をされるというふうには伺っています。ビジターズビューローや観光交流局とも連携をとりながら、幅広くいろいろな方面で博物館のことを知っていただけるように取り組んでまいりたいと考えております。

○会長：ほかにいかがですか。

よろしいですか。

(4) 第3期リニューアルについて

○会長：時間が過ぎていきますので、それでは、最後の議題がまだあります。

第3期リニューアルについて、資料の説明をお願いします。

○事務局：私のほうから、引き続き、第3期リニューアルについてご説明させていただきます。

資料4、お手元にございますけれども、パワーポイントで説明させていただきますので、よろしく願いいたします。

第3期では、A展示室、B展示室のリニューアルを実施いたしますが、琵琶湖の魅力を発信し、現在とつながる展示空間となるように進めてまいります。琵琶湖博物館の活動が、さらに見えて、伝わって、そしてさまざまな人と多様なつながりが広がる、そうした新しい機会を提供するように、琵琶湖博物館と周辺のフィールドを活用して、フィールドの楽しみ方や発見することのおもしろさを、さまざまな体験や実践を通じて伝え、博物館機能の一つである研究もわかりやすく発信してまいります。

また、リニューアルの特長でございますけれども、これまでの展示は、環境や生き物、そして人間活動、それぞれの関係に着目しながらも、そのつながりを十分表現することはできていませんでした。そのため、新しい展示では、過去と現在、それから

展示内容と来館者のつながりを伝えることに重点を置きまして、環境、生き物、人間活動の関係性をわかりやすく展示することで、自分とのかかわりに気づけるようにいたします。

それから、これまで一般的な博物館展示では、一般の方々にとって歴史とは現在と分断された過去と捉えられることが多かったわけですが、新しい展示では、歴史を今と未来を考える手がかりとしての位置づけ、今の視点を持ちながら歴史を見直して、湖と人間の未来を考えていく展示といたします。

また、新しい展示では、地域を知る人々との協働により展示を行いまして、来館者の会話や交流を促して、博物館や地域の人と来館者が語り合うことができる交流スポットを設置することによって、博物館スタッフと地域の人と来館者の交流を促進したいと考えております。

展示の考え方としましては、博物館の現在を捉え直すそれぞれの時間軸、A展示室でしたら、琵琶湖が誕生した400万年前から現在、それからB展示室でしたら、琵琶湖の周りに人が住み始めたと言われる1万数千年前から現在のスケールで、自然や人々との暮らしの変化やつながり、そうしたものを伝えて、琵琶湖の過去から今、未来を考えるような、多様な視点を提示いたします。

展示室の現状ですけれども、A展示室ですと、余りにも長い時間を取り扱っているために、遠い過去に起こった出来事と現在のかかわりが意識しにくい展示となっています。現在の展示は、古い時代から新しい時代に向かって、時代ごとに、地形、湖、気候、生き物の移り変わりを包括的に紹介していますけれども、リニューアルによって、現在を入りに古い時代にさかのぼることで、過去から未来へつながる展示、現在を考える展示というようにしていきます。

また、地形や湖、それから気候や森、それから生き物、そうしたものの変化を個別のコーナーとして紹介して、現在とは大きく異なる環境であったという過去を伝えて、その変化が現在の環境をつくる要素となって、さらに未来へも続いていく、そうしたことを知っていただきたいと考えております。現在、琵琶湖やそこにいる生き物を生み出してきた数百万年から数万年という長い時間のスケールの中で、自然環境の変化を自然災害や地球温暖化、そうした種々の環境問題とのかかわりとともに紹介いたします。

また、長期的な自然の営みといった視点から見た、生き物としての人を考えることで、B展示室やC展示室へのつながりもよりわかりやすくしていくものでございます。

展示のイメージにつきましては、体験型・体感型の展示により、驚きと感動を持って理解を深めていただきたいというように考えているところでございます。

ゾーニングのイメージといたしましては、導入部分は常設展示の入り口ともなることから、現在の琵琶湖の風景をつくる過去へつながるもの、そうした地層や化石、岩石などを紹介して、現在と過去が繋がっていることを紹介します。

そして、中央部には琵琶湖と生き物の物語として、過去の環境変化について、大地、生物、気候の変化の概要を伝えて、それらを知ることができた証拠がフィールドにあることを紹介していきます。その周りを変わる生き物や大地、それから変わる生き物、変わる気候と森ということで、それぞれのゾーンで取り囲んで紹介することによりまして、それぞれの変化や相互の関連についての視点を提示するものでございます。

結びに、大地、生き物、気候のどの自然も変化し続けていく中で、生きている人はどういう生き物かということに思いをめぐらせていただきながら、次のB展示室に引き継いでいきます。

続きまして、B展示室になりますが、これまでの湖における人間の活動の歴史を中心とした展示から、歴史展示の中に自然環境という要素を取り入れて、自然環境と自然認識の変化に軸足を置いて、自然の変化と人々のかかわりの歴史を扱っていきます。

現在は、「生業」「湖上交通」「漁撈」「治水・利水」といった4つのテーマで、文化財をもとに人と自然のかかわりを展示しておりますが、自然と人間のかかわりをよりわかりやすく伝えるためのゾーン分けをすることになっております。

ゾーン分けのイメージとしては、自然の関わりをわかりやすくするために、中央の里ゾーンを中心といたしまして、森ゾーン、水辺ゾーン、湖ゾーン、コレクションゾーン、そして最後にエピローグという構成を予定しているものでございます。そうすることによって、人間が自然環境にどう働きかけていたかということを示す前例のない歴史展示というふうにしたいと考えておりまして、現在と未来を考える環境学習にも活用できるということを目指しているものでございます。

詳細は、今後、実施設計で詰めてまいります。本日は、中心となるコンセプトをご報告させていただきました。ご意見やご質問をいただけると幸いです。

今後は、協議会を初め県議会や有識者評価、ユニバーサルデザイン評価等でご意見を参考にしながら、実施設計を進めてまいります。

ご説明は以上でございます。

○会長：ありがとうございます。

本日は、コンセプトについて基本的なところの説明をしていただいたというところですが、何かご質問とかございませんでしょうか。

○委員：誰か全体のプロデューサーはいるんですか。

○事務局：プロデューサーということではございません。もともと、それまで博物館が培ってきたコンセプト、それに基づきまして基本計画を策定いたしまして、その基本計画をもとに、今、実施計画を積み上げているところでございます。

○委員：私自身がこの1年ぐらい、博物館をつくるのをずっとやってきたもので、これを見て、すごく不安になったんですけど、いろんな人の意見を聞くと大変なことになるんですよ。だから、例えばこの展示室はこの人とか、この展示室はこの人とか、何か多少とんがって、ぶつかってでもコンセプトを明確に打ち出すことができる人がいて、周りはなるべく邪魔しない。暴走したときに、とめなきゃいけないというケースもあるんですけど、みんなで話し合ったほうがいいことと、そうじゃないことのメリハリをつけるというのは、すごく大変だったなというのが、今、振り返って自分の感想としてあるので、このスライドですごく不安になりました。

○事務局：すみません、これはどちらかというと、プロセスを表示させていただいたので、こういったところでいただいた意見をすべてを取り込んで、そうした意見に沿うような形で作り上げていくということは想定してございません。もちろん、これまで博物館、当初、平成8年に開館して、そのときのコンセプトがあって、ずっと続けてきて、研究を積み重ねてきて、そして今日的な課題も取り込む中で、新しくリニューアルという形になりますので、もっとああしたほうがいい、こうしたほうがいいというご意見を賜ることは非常にありがたいですけれども、その意見を参考にすることはあっても、基本的に流される、振り回されるような形では考えておりません。協議会の委員さんにこういうことを言うと、失礼で申しわけないんですけど。

○委員：いえいえ、頑張ってください。魅力的なものをつくるやり方として、学者と役人が会議をするというのは最悪な取り組み方かなと。協議会のバランス感覚みたいなものを上手にやっていただけたらと思います。

○委員：すみません、1つ質問があるんですけど、この『びわはく』という情報誌、これは今までは、こういう手のものはつくっておられなかったのでしょうか。

○事務局：『びわはく』という情報誌は、創刊号なんですけど、その前を振り返ると、『うみんど』という機関誌のようなものを出してしまっていて、何号かずっと継続して出しておりました。あと、『うみっこ通信』という子ども向けの機関誌ですか、そうい

ったものもつくっていて、今回、位置づけとしましては、予算とかがかなり減ってきて、情報発信がなかなか減ってきているという状況の中で、この『びわはく』という情報誌、機関誌を発行しようとして、第1号を出版しまして、今度、第2号を刊行する予定にしています。

第2号については、第1号でテーマ性を持たせることができなかつたので、テーマ性を持たせて、もうちょっと読み込めるような形で、『びわはく』という情報誌をつくらうということで、今、進めているところです。

○委員：これは無料で配布。

○事務局：ええ、無料で配布しています。

○委員：来館すれば、館内のどこかに置いてある。

○事務局：はい、そうです。入り口のところにも置いてあります。

○委員：例えば、みんながこれを持って帰れるわけですね。

○事務局：はい。

○委員：これはものすごくいいと思うんですけど、財政的に大変かなと。

○事務局：財政的には、印刷費とレイアウトする予算とか、そういったものを今のところの予算で何とかやりくりしているという状況になっています、数十万円ほどで。もっとちゃんと質を上げようとする、財政的にかなり予算がかかるという状況にはなってきますが、今のところ、印刷費とレイアウトするような予算、そういったものです。

○委員：こういうのはホームページで公開はしていますか。

○事務局：そうですね。ホームページで公開しています。

○委員：紙媒体だと大変だと思うんです。それプラス、ネットで見られるようなシステムにしていただきますと、琵琶湖博物館の研究員が何をやっているかというのがよくわかりますし、これを見ると、非常にまともなことを書いておられるので、失礼な言い方ですけど、こういうのはものすごい大事なんですよ。外部の人が、博物館ってどういうものかを知るときに、研究員がやっぱりこういう書き物を外へ向かって発信していくというのは、すごく大事ですので、紙媒体プラス。紙はなくなりますし、置いておいても。ネットだったら、来館者以外の人でも見られますし、そうしたら、これを見た人が、ちょっと展示を見に来ようかということになりますし、これはいいかなということは思ったんですけども。

○事務局：今後も、『びわはく』の中身を充実させて、情報発信していきたいと思いま

す。

○委員：さっきおっしゃったように、これは創刊号ですが、ナンバーごとのテーマというのは、あってないようなもので構わない。雑誌ですから、何でもありでいいんじゃないかなと私は思うんですけどね。

○会長：もう何でもありになってきましたので、議題から外れても結構ですので、言い残したことがあったら出してください。

○委員：先ほどのリニューアルのことで、来館者調査というのがあったかと思うんですけども、どういうふうに来館者の調査があって、それを利用されるのかなというのをちょっと伺いたいと思ったんです。

その前に、私、この間、平日、ちゃんと入館料を払って、新しいリニューアルを見せていただいたんですけども、本当に椅子もたくさん増えたなと思いますし、平日ということもあるかもしれないんですけど、若い方が男女のペアで来られていたりとか、おとなのディスカバリーなんか本当に居心地がよくて、私、つい1時間ぐらいで時間がなくなってしまったんですけど、本当にすばらしいリニューアルだなと感じました。

その中で、私、実は気になったところがあって、A展示室の手前にある琵琶湖の航空写真の部分が、多分、前と同じだと思うんですけど、どうやったかなと思って、もう一回、今日、ここに来させていただく前に寄せていただいて、自分の家が和邇なんですけど、和邇からずっとたどっていったら、ああ、そうだな、湖西バイパスが途中で途切れているんですね。そうそう、これはここがオープンしたときの航空写真だったというのがあって、じゃ、それがどこに書いてあるかなと思ったら、ちょっとなかったんで、解説員の方に伺ったら、本当に丁寧に教えていただいて、オープン前の2006年か2007年ぐらいで写真を撮って、こういうふうにあるんですよ。ここはちょっと途切れていますけど、今はここまでつながっていますよとか、そのときに新しくできたシートがありまして、鉄道から見たらこうですよとか、川から見たらこうですよという資料があって、すごいすてきと思ったんですけど、本当に解説員の方たちの本当に丁寧な解説というのは、琵琶湖博物館の底力になっているんだなという印象を受けたものの、やっぱり展示してある限りは、何年の写真やというのがあったりとか、先ほどの遠い過去から未来があったとしたら、20年ほど前から今というのも大事な過去かなと思うので、その資料の中に20年前と今というのが比べられる資料がもう一つ加わるといいかなと思いました。

それと、もしもこれからまたリニューアルをするにあたって、利用者の方のつぶやきが聞こえたので、お伝えしておきます。

おとなのディスカバリーにいられていたお年寄りの方がいらっしゃったんですけど、お二人でお見えになっていて、立ち上がろうと思ったときに、とても立派で重厚な椅子で、座り心地がとってもいいんですけど、じゅうたんなので引けないんです。「重いな」っておっしゃって、動けなくて、ちょっと手伝ってもらったっていう場面がありました。なので、椅子というの、ちょっと見ていると、ご年配の方とか、未就園児さんが増えているということなので、そこら辺の配慮もしていただけたらなと思います。

○会長：ほかにいかがですか。

○委員：初めて参加させていただくんですけども、我が家はすごく貴館の大ファンでして、息子なんかは、もうこちらのいろいろな展示とかに出入りさせていただいて育ったようなものです。息子は今現在、中学生なんですけども、学校との教育課程ですとか、カリキュラムに沿った展示ですとか、あと、ワークショップとかがあると、より学校での学びが深まったり、理科って体験に基づいた教科だと私は思っているんですけども、ここ最近、学校のほうでは理科離れがよく言われていまして、子どもたちがやっぱり体験する時間とか、そういう機会とかが少ないのかなというのを感じていまして、そういう学校のカリキュラムに沿った展示とかがあると、せっかくここはすばらしい施設で、滋賀県が誇れる場所ですので、滋賀県の子どもたちの学びをサポートしていただくという形でもお力添えをいただけるといいのかなと感じます。

あと、現在、学校ではあまり生き物を飼うという機会がないようで、息子が行っていたところでは、地域の県立大学の学生さんに協力をしていただいて、生き物を一緒に飼う準備をしていただいたり、説明をしていただいたりして、去年から生き物を飼い始めました。ドジョウですとか、フナですとか、アカハライモリとかを飼っているんですけども、今年はまた新たにナマズを飼ってみようかなということでやっていきたいと思っているんですけども、そういった形で、先生方も何か飼ってみたいなって思っておられるのかもしれないんですけども、飼い方がちょっとわからなかったりとか、やっぱり生き物ですので、亡くなったときにどうしたらいいのか、子どもたちにどう知らせていったらいいのかというところも、多分、先生方はお悩みだと思います。また、こちらのほうでサポートしていただけるような機会があれば、もっともっと現場のほうで充実していけるんじゃないかなということがあります。

もう一つ、先ほどお話がありました若い世代の方への集客ということなんですけども、私もちょっと地域のほうで生き物に関する活動とかをさせていただいてまして、私も感じるんですけども、私たちの親世代っていうのがゲーム世代なんですね。それで、割と小さいころに余り遊んでいないというか、実際に体験をして、釣りとかをやったり、外で遊んだりっていう体験が少ないので、子どもにそういう釣りとか何かをさせたいと思っても、なかなか親ができないという現状をよく耳にします。ですので、こういったところで親をサポートできるような体制。子どもは本当はやりたいと思っているんですけども、やっぱり親ができないので、なかなかできないというような現状があります。

あと、共働きとかで忙しいので、スマイルカードというのがありましたね。あれは月1回ですね。なので、共働きですと、月1回だと、そこに合わせて行くのはなかなか難しいというところもありますので、できればもうちょっと回数を増やしていただくとか、小学校の家庭にはもうちょっと増やすとか、そういった形でご検討いただけるとありがたいと思います。

○会長：ありがとうございます。

また、館のほうで受けとめていただきたいと思います。

○委員：資料4の50ページのところに、展示空間の再構築の詳細案が出ていますが、ここで私がずっと気になっているのが、4-2の六道めぐりなんですね。六道めぐり、説明とかもちょっと難しいし、でも、知ってほしいことであるなどは思っているんですが、あと、これにプラスして、実は戦国時代の話、武将とか、そんなのは入れられないかなと思っているんです、戦国武将の関わり。例えば関ヶ原だったら、36だかの武将が関わったうちの半分ぐらいは滋賀県出身の武将なんですね。そういうことで、今まで私が関わっていた近江歴史回廊大学というのがありましたが、それが毎回、コースが3つあったんですが、その中の1つに必ず戦国コースというのがあって、それはいつでも人数オーバーだったんです。40人募集のところを倍以上来る。しかもリピーターがすごく多いという感じで、ほかのコースは、東海道とか、中山道とか、観音とか、いろいろコースは変えていたんですが、戦国だけはずっといつもあるんです。それでいて、いつも応募者の数が一番多いという形でしたので、ここのムラの信仰というか、中世のあたりの話で、戦国の武将たち、滋賀県出身の武将がその後、大大名になっていくのがありますので、そこら辺のことも少し、せっかく歴史なので、お客をキャッチするためにも戦国の武将とか、そういうことが少し入ったらおもしろいかなと考えています。今

でもあちこち、ムラの信仰、特に高月とか、あちらのほうに仏様がそれぞれの集落で守っていらっしやるところがすごく多いんですよね。それで、そういうところへ行きますと、まるで昨日のことのように、信長さんに焼かれた、信長さんに焼かれたっていう話がどこへ行っても出てくるんです。でも、うちのところ、うまいこと、ほかの関係のないところを燃やして、寺が燃えましたので、もうないですっていうふうにして隠まったとか、そういう話を昨日のことのように地元の人には話されるんですよ。それだけ地元でそういう戦国時代の話というのが結構しみついてますので。

そして今、結構ほかでもそういう戦国の方のももちろんですし、そういうのが「何とか女子」というのではまっているところもありますので、六道絵だけではちょっとおとなしいかなと思うので、そういう華やかな、今だとなぜか華やかなんですね、戦国の武将というのが。そういうところももうちょっと入れてみたいかなと考えておりますけど、いかがでしょうか。

○会長：今のご意見、ぜひ参考にさせていただいて、取り入れられるところは取り入れていただいたら、ありがたいと思います。そういう地域の方も来ていただけるようにという事で。

○委員：このリニューアルに非常に大きな期待を持っているという立場で、少し伝えさせていただきます。

当初、琵琶博ができたころの数年間、早くあそこに行きたいというのを、県内各地でどのようにバスの手配をして、中学校の団体で行かせていただくことを、私も理科なんですが、理科の部会であるとか、環境部会であるとか、その他の部会でもよく話が出ていました。

だんだんと、みんな慣れてくるところもあって、1回行ったということとか、その後もリニューアルは少しずつあったんですが、なかなかキャッチーには届かなかったところもあるかもしれません。先ほど来、理科離れであるとか、それからターゲットを小学校のとかいうところのお話をいろいろ伺うところで、今回のリニューアルについては、私も理科の支部長もしておりますので、その他のところでも伝えていることとか、広報も伝わっているところと、残念ながら県内各地の中学校関係者が知り得るところは、あんまり聞こえてくるところはないかもしれない。そういったところに少し力を入れていただけるとありがたいとは思っています。

リピーターとして、中学校以上の子たちが、交通の便もあるんですが、何回もここに来たくなる状況というのをどういうふうにつくればいいのか、私もここに来るたびに

考えながらやっているんですけども、なかなか難しいところがある。むしろさっきのイナズマロックじゃないですが、アーティストの一人も来れば、そんなことがばあーっと広がるぐらいのところ、集客に対してはいいかもしれない。

しかし、博物館というところは、テーマはいろんなことがあります、よりマニアックといますか、専門的な子どもたちが来るようなイメージがどうしてもある。崇高性から考えても、それが必要かもしれないので、集客だけに結びつくところは難しい、複雑なところもあるなと思っています。

いっぱい言いたいことはあるんですけども、ただ1つだけ、ここは環境学習とか、理科のアプローチが主ではあったとしても、それだけでは絶対ないということです。これは何回も今までお伝えさせていただくこともあったんですが、例えば小学校も中学校も総合的な学習という分野がありますけども、大半のここに来られる小・中学校は、そのカリキュラムで言うと、その時間を使って来ると。つまり、どの教科、アプローチとか、どの感覚からしても、非常に知的好奇心を心からえぐられるようなところがあります。展示のされ方一つ見ても、美術館の担当者とか、子どもたちにでも絵の好きな子たちがいると、こんなふうな展示の仕方があるとか、工夫があって、全てが子どもたちのそれこそ好奇心をえぐるようなところがあるというふうに思っていますし、それからまさに新学習指導要領では、探究心であるとか、自分で考えて学ぶ力をつけるために勉強するということがうたわれているんですけど、その先にあるのは、やっぱり将来を見詰める自分自身だったり、まさに生きる力になっていくんですけども、ここはそういう意味でも全て、働く方から展示されている内容、工夫されている全てが将来の自分のあこがれの博物館だというふうにずっと思っています。入場の値段が安いということもありますけども、本当に働かれる方とか、まさに展示されている内容、全ての内容が、将来こういう働き方ができたらいいなとか、学芸員さんって、こんなことをされるんだなっていうことが、さっき交流という話があったんですけども、体感・体験できるすばらしいところだと思っています。

ぜひ、リニューアルのことについても、もちろんインターネット等でアプローチする子もいますけども、一生懸命口コミで広がるところを、私のほうも、皆さんのほうも力を入れて、ぜひ中学生以上もここに来る気持ちがどんどん膨らむようなところであっていただきたいと思います。教材として本当にすばらしいところが滋賀県にはあると、そういうふうに思っています。

以上です。

○会長：ありがとうございます。

見学の時間がなくなってしまいそうなので、ほかになければこれで終わりたいと思いますが。

○委員：最後まで黙っていようかなと思いましたが、皆さん、発言されたので、雑感をお話しします。

以前、私の友達でフランスから来てくれたので、滋賀を案内しよう、滋賀は自分から見ても、ここやというところがないなと思っていたんですけど、改めて地元を調べてみまして、草津市の水生植物公園、琵琶博、こちらへ伺いました。そうすると、来る人の目線というのが、地元に住んでいるから、博物館という感覚のぼおーっとしている者と、外から来る場合の目線が違うんですね。展示物でも、昭和初期の生活の展示であるとか、何でもない琵琶湖のヨシ、魚、鳥なり、何かその辺をじっと凝視していたんですね。何かその辺が違うので、目立って、一言で琵琶湖はこうやというようになりたい文句は難しいかなと思うんですけど、やっぱり生活に関わって大事なマザーレイクじゃないですけど、命の源ですし、そういう意味においては、京阪神、京都、大阪からどんどん来る内容があるなと思いつつも、余りまたたくさん来てもらうと困るなというか、内緒にしておきたい、大事にしておきたいというところも反面あるんですけど、その辺は人によって違うということで、やっぱりここは静かな博物館で、広く、人それぞれの命、生活に関わっていくなと思うので、私は今のスタンスがいいかなと思います。

今日もリニューアルしてから初めてでしたので、水深何メートルのさわってきました。あっ、冷たいんや。多分これ、私はスキューバはできませんけど、そのまま沈んでいたら死んでしまうとか、初めて体感をしましたし、何かそういう意味では、非常によりよく自分にとっても値打ちがある博物館やなというふうになってきたなという思いが一つありました。

もう一つ、滋賀県の山、田んぼ、琵琶湖、去年ですけど、同じく友人が中国から来ました。そして、湖西線を走ったんです。「山があり、生活の平地に田んぼがあって、琵琶湖、すばらしい」と言っていました。えっ、どこがすばらしいのという感覚でしか私は聞いていませんでしたけど、やっぱり滋賀を褒めたたえる言葉やなと思いましたが、車で湖岸を走っていましたら、写真を撮っているんですね。風景じゃなくて、田んぼの稲を撮っていたんです。「何撮ってんの、何かいる」と言ったら、「緑が美しい」と言っていました。同じ緑一色でも、光の当たるところ、肥料の多い少ないと

ころ、風向きによって揺れる、その辺の違いを見る目があったというので、逆に私は、滋賀県、琵琶湖、この辺の水田、生活、あっ、すごいんやなということ、その友人から私は感じましたし、そういう意味では、滋賀県っていいんやなど、自分では感じていませんでしたけど、外から来た人に教えてもらいました。

それと、すみません、できたら予算があつて、年間スケジュールがあつて、今年のタイムスケジュールみたいなどころもあれば、32年リニューアル完成、32年、えっ、いつから始まるの、工事はというか、何かその辺のフローがちょっとわからなかったの、またその辺もあればいいかなという具合に思いました。

1点、ちょっと気がついたのが、資料3の利用者の推移で、29年の表と、こちらの横長のリニューアルとの数字、4ページですか、この数字が違うかな。どっちがどうなんという、ちょっと疑問が一つありました。これはどっちでもいいです。

それと、もう一つ、琵琶湖博物館ってどの辺のポジション、日本の中で人気あるのかなと、まず世界から調べました。残念ながら、世界でも10番には入っていませんでした。それで、じゃらんで見たら、滋賀県の琵琶湖博物館は21位に上がっていました。ほかの博物館を見ていると、やっぱり1位は恐竜博物館になっていました。そのウェブの関係ですけど、3番の大阪のカップヌードルミュージアム、これはちょっと違うかなという感じもしましたし、リニューアルして、3期も完了したら、多分、この21位も今後上がっていくんじゃないかという思いで見っていました。今後また期待しております。

○会長：ありがとうございます。

皆さん、積極的な発言、ありがとうございました。これから2年間、この顔ぶれでやっていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

それでは、マイクのほうを事務局にお返しします。

3 閉 会

○副館長：山西会長並びに委員の皆様方には、長時間にわたり熱心にご議論いただきまして、ありがとうございました。

本日、幾つか重要な視点も与えていただきました。特に企業連携については、時代の流れとしては連携を進めていくという方向性にありますが、行政の公正中立性には十分に注意しながら、よりよい方向で事業を進めていく必要があると考えております。

また、来館者の増加に向けた取組につきましても、琵琶湖・淀川流域の京阪神に対

する広報も必要ですが、やはり地元の滋賀県内の小・中学校をはじめ、ご指摘のありました子ども会や、老人会についても県全体の団体等がございますので、そういったところに対する働きかけを行いまして、足元をしっかりと固めることが大事であると考えております。

いずれにしましても、本日いただきました意見につきましては、私どものほうで十分検討いたしまして、今後の博物館運営に活かしてまいりたいと考えております。

なお、次回の会議につきましては、31年3月を予定しております。後日、日程調整につきましては連絡をさせていただきますので、よろしくお願いします。

この後、現在開催中の企画展示、またこの夏にリニューアルいたしましたディスカバリールームと、おとなのディスカバリーにつきましてもご案内をさせていただきますので、時間の許す限り、ご覧いただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

[15時30分 閉会]